幸崎三郎

中村俊定文庫
文庫 18
346

京都帝国大学図書

辛崎三吟序

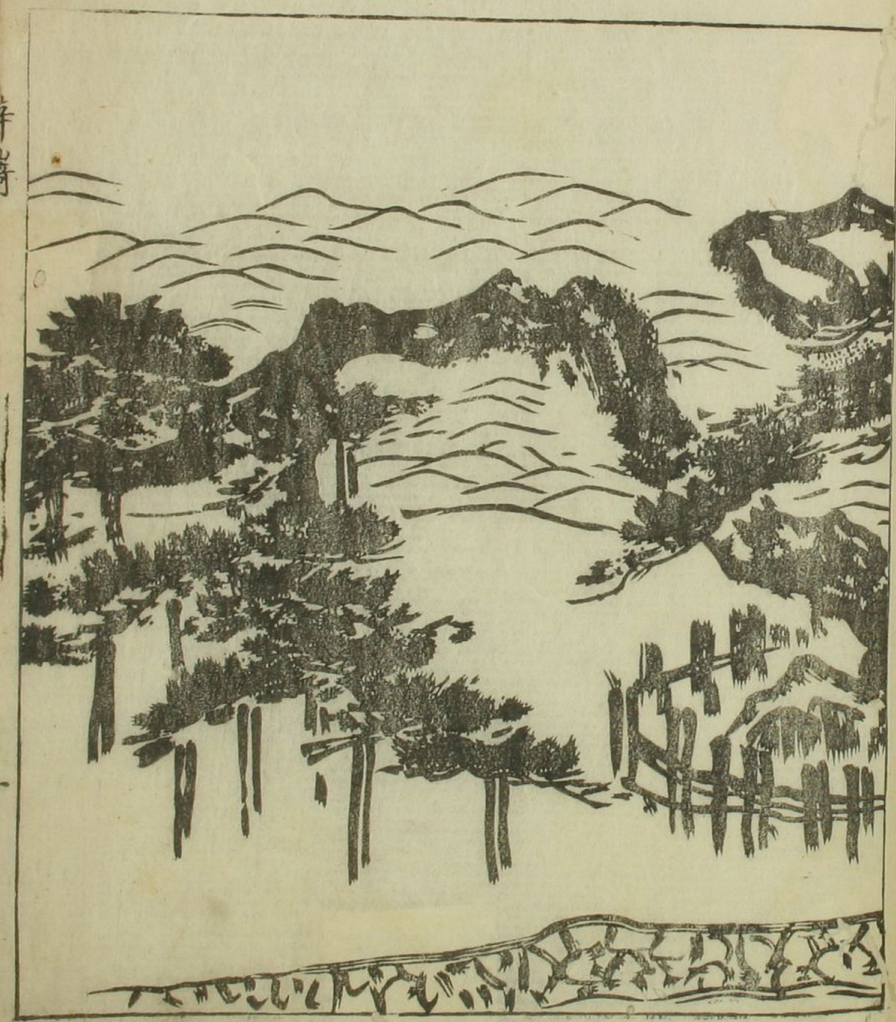
京都帝国大学図書

むかし俗士人江戸に出られし時、芭蕉の翁と越智氏女の系を慕ひ、さハぶ一部を中ごろ初めて実検をあらはし、さるのくりまゝて故人の跡を尋ねて、彼の眷属の老いたるにたゝりて、ものきめをせること年月を経て、知友人洛源と共に洛陽を富有する事あり。一日世界無常ぬとゝ業樹の志願あるをもて幸潔松下よ

松宇文庫
中村俊定文庫

拙子の日雪中菴を訪ふ時柳枝帰洛の後
ひさしぶりの打ちつれ嬉しくも会ひてうれしき
携帯茶席を請ひ出で来遠の恙なきを祝し
ふる郷の白あり梅あり果実あるを喜べり
奇絶の手たづさへ来りて茶を煮て清交を楽しむ記
中あり師を又雑波津に訪ふ会ありて吹雪ふぬ
遠坂の雪を冒して後八絶て難津のあるを
こゝに来るの語を云来りて行りる時雪
月を前の一絶飯を書き雨波会を云ふ又命ず
ひとと彼都のうち桜花の折り霊子の時宜乃
一句よりも松陰の吟を沈て深き幸清三吟とす
多年松の系れたる実あり一ひら書く
梅ありて伊賀芝居を柳塘下の松波につく
筆を捨てゝとる

寛政八戊寅冬雲月



畫一筆書

其一　蓼太

夏の日やめらめらと燃る石の上　柳波
七夕さまくもの丸き柚のくれ　湖涼
見せまうの蔭の茶ゆも其まに　太
使ひもの〻兼わてをかし　波
こぼれ萩を掃て月の雲の　涼
いとひやうたる蓮の葉　

蘭の名号称ふるの草の林　太
嘯亭の外の何ぞ遥なる　波
垂甲のあるぬ姫ぬまの崩菱　涼
目遠くいれを見る雲の　太
孫太笠の山かくれの正し　波
むをめおせくれくるい　涼
月くるる八日の月の載を置　太
彩牡丹の仏ぬ　波

此人神ものの文く　如雷
国乃をとゝ川ちりく　太
白雲ゆく月の明清め　涼
掛く茶碗ゝ為むと　雷
蓋ゝ成る強乃者子の色てゆく　波
振くむりの如ゆく　涼
あるゝ時ゝ為セ此面ゝ色あゝ神　太
つゝゝゝゝ数陪風連る　波

あゝゝ口ら通ふ為元此時ゝ　雷
鑵子伽羅　紙　ゝくゝむ　太
啖逝ゝあゝゝゝと為賣　涼
ゝゝは　ゝ者の此星　雷
後風土紀の引　ゝて玉搭子　波
おゝゝゝ足ゝゝ　ゝゝかゝる　涼
むつゝい月を宗紙此出ゝく　太
ゝゝあゝ　ゝ筆柿　波

冥机の歌もなき世をうり　涼
日をてらくとロつりまで　雷
折付て茶漬の雨をする合点　太
扇乃上へ鶴智鶯波敷　涼
たゝ月芝弱くるもの張　雷
其一文字子紙子のもくり尾　波

其二

幸崎や直さち無き松の雨　柳波

中ゝを橋に考へられむ　涼

物もなき庭に笹ふる時　蓼太

さゝと食ふ後に松もてこい　如雷

文目の新きハ中ゝきのふより　涼

一番ゝ刈に市ゝ高り　波

掛ゝ乾あゝ橋に蓼の時　雷

蛇屋をちと山ゝ碑に　太

伽羅をこゝ沢ゝ向梨に寺を振　波

ま[illegible]海と雲ゝ[illegible]ま[illegible]ゝ　涼

本葉ゝとも尾に波に線ゝ　太

筆に成てゝ芋に振あゝひ　雷

晴ゝ[illegible]ゝ男ゝ　波

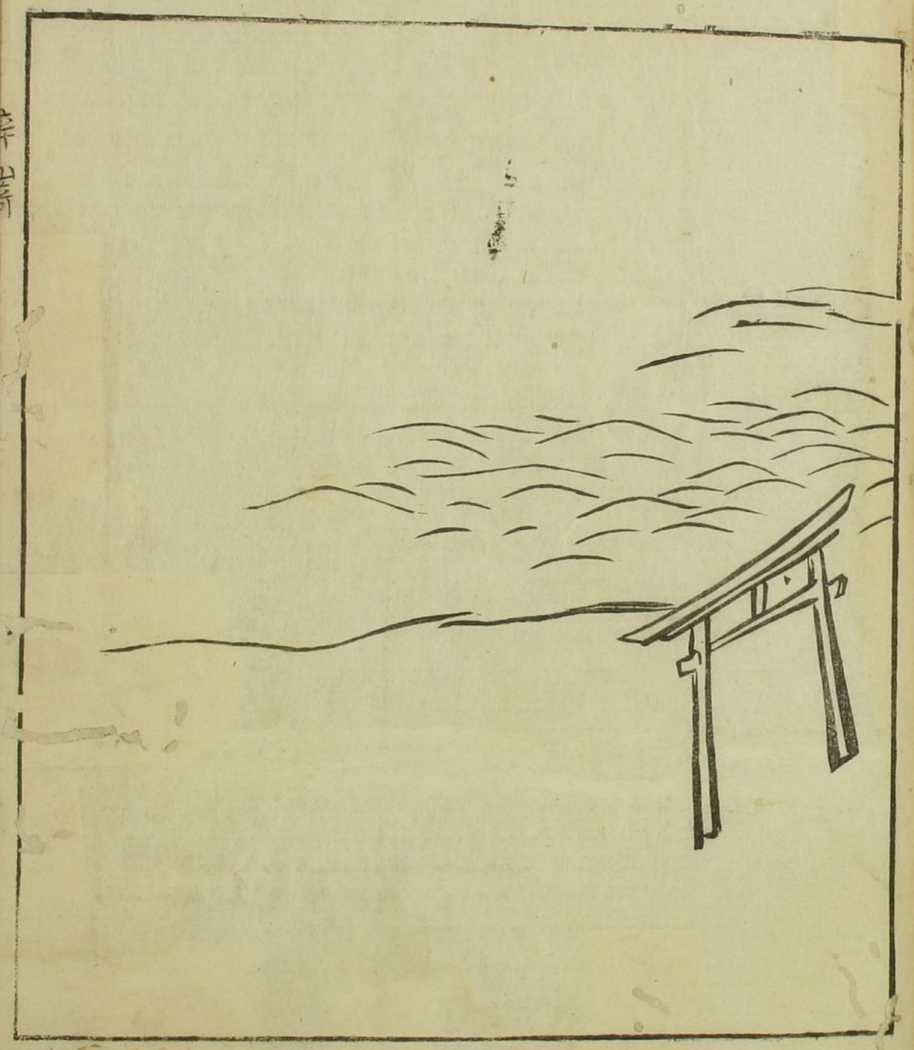
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ　太

拾貳つゝ詰屋敷はあきの節
小判ハ二つ宿ゝ
さゝ小を除き
厂のかゝるを無の事
繰ゝ紙巴
猪口ハ皮雜
かゝる丸自ひも蓮の咲時
帰りそいとかんこゝ

涼
攻
雷
涼
太
雷
攻
太

傾策を只社ゝ
たゝ月ゝ冊ゝ
ゝよ件ゝ
芸藝 酒の入れを少
使ゝ
逢別ゝ芸
芋社案ゝ芋
芸ゝの社社

涼
攻
太
涼
要
太
涼
攻



寄

八幡宮の御社にて

涼

人知れぬ思ひあり

霞

思ひ出でて心時もあり

波

思ひこそらて寄ぬ時

涼

相生の松に吹ふく柳ゆゑ

太

賀茂の御社の前

波

其三

湖涼

玄圃や竹杖持てを松の杖

孫ありけりと世に成ぬ立春　蓼太

呵らぬも云ふ事も春清明　如雷

ひとすぢに宮ぬ灯ともつく　柳波

帳低揚て沖を湖に月沈み　如風

鶯の鳴ものさせを帰るる　涼

少

雲霧に去ぬ上に月出て

云ふとものとかふふる足ふ新　太雷

仮枕に世を代を参をせて　波

思ひ堤おろ松田人ふ水　風

渕鯉に情を繋ぐ蓮も参り　涼

矢ふ手さまさ仏女いとひ　太

ほとろひさ宵ぬ踊の袖たを　雷

月も松の西に出ぬ　波

笠ふるひて立ちいくるや新の風　風
石沢の流を拭ふ滝玄　涼
夕虹ふるあをれ草して　太
一蕉行脚の紙しの時　雷
十九　世代をうつる浦浦とい世　波
高を滝流れ流しの　風
荻を穿て風は和ふ波の時　涼
赤い実をうつす本を何の　太

二階ふる家の人ふる家ふる　雷
かふるを聞くはらく雷　波
坂を出る弘法のきほひ　風
ふと庇ひ月出て　涼
化るを及ぬ白ひ夏ふ　太
ふしぬ雨の通る雷　雷
帰路を五位の鷺の三日の月　涼
鶏ふるを月ふる　風

みちのくはよもの裾野なる波
市子網戸のゐ物なり太
世の中子嘲ひといつるもの一つ風
ちらい沼屋子取を交ても涼
京長茶嘗ふ計ハを北四てを雷
叫ぶ乃ぶ乃ぶ波

晴嵐十詠

芦枯く深子蟬鳴ぬ吐月
ホカ〳〵やと明を庚して松の影這平
晴〳〵明を山や高田を新田し如雷
高砂羽の弟を晴て若葉の外柳波
鶯の彩さ〳〵〳〵泡涼し夜光
一声を塚を晴を松の風泡涼
夕晴や虹の亀明を涼如風

日ふかく色ある田畑の黍の穂　夢且
空ふかしかすみ田面のあしの穂　凡秋
白いろ仕ふる山や雲の峰　夢太

夕照十詠

入る日ほそ橋や舟のやり　這平
落る日や鹿さけて蛍より　柳波
淋田に日ぬくもりて蛍火　秋光
高ふかり淋田に入日を迎ふ　如雷

深ふかく細ふ夕日やもの寂　如凡
蛙蛙や岩鼓ひびく夕べ　義且
沢蟹に落ちる松の紅葉哉　凡秋
一京一て点入日乃氷柱哉　夢太
淋ー新の備ー中や雲のみち　吐月
標ー社田ちかさもあ涼の角　柳涼

晩撞十詠

義士や撞鐘の少ふ死ぬこと　如雷

入相を突て出る也飛かゝる　秋光

来鬼は合点なり蛍乃鐘　湖涼

咲鐘殿おのゝ突て桂の雨　風斎

竹寺や入相聞し藤棟　蓼且

鐘〻を遠寺ハ消て露のふ　吐月

出代や名残て聞鐘もあり　造平

六月も夕暮もあり三井の鐘　蓼太

咲鐘や誹文年は尾上より　柳波

入相は鐘ふむ山や雲乃峯　如風

帰帆十詠

帆を揚て舟は飛ける木葉の秋　柳波

さゝしきさぬる八宮の帰帆かな　秋光

あしらひて帆とく果ハ秋の暮　蓼太

咲かゝるも紅葉や帆掛舟　如風

千鳥くゝ暁霧む帰帆かな　造平

夕暮や矢橋に何む帆かけ舟　如雷

秋立や海水を帆の白さより　吐月
すしさわやかに乃ちく帆無く丹　湖涼
涼しさや汗かく者の袋ちり　風祢
一船を捨てふる紙帰帆代　蓼丑

落雁十詠

沈て入影ちらてて蔵る二ノ　夜光
月のあしを乗越や天の川　如風
種を拾く蒔を行く後る雁　湖涼

月おつむつしの西や小田北ノ　柳波
行羽ばく入日や拾く蔵る雁　蓼太
月ばや松塔を沒ちら　吐月
蔵てちく一羽ちく小田北る　這平
ちつしや竹のえく初る雨ちら　如雷
初雁や門田ち裏紙ゆて蔵る　蓼丑
深雲を笠田ちく蔵て月沈る　風祢

秋月十詠

[illegible]の[illegible]者あり[illegible]月　蓼太
[illegible]の石山ちやうふの月　湖凉
芭蕉葉[illegible]雪折[illegible]の月　柳波
名月や格子一枚[illegible]　如風
名月や空を移る水の上　這平
[illegible]の[illegible]ゆく灯を[illegible]の月　如雷
さゝ波や鶴[illegible]月[illegible]　扶元
空[illegible]又九[illegible]やちふの月　蓼丑

名月や遠山[illegible]　風齋
[illegible]や[illegible]中[illegible]の[illegible]　吐月

暮雪十詠

八[illegible]ゝけて[illegible]や比良の雪　柳波
[illegible]決[illegible]一村[illegible]　蓼丑
[illegible]の[illegible]雪　風蕪
[illegible]枝[illegible]雪の[illegible]　這平
[illegible]雪[illegible]例[illegible]　如風

子ゑ帰雁を送りて茅舎を
立る月は一面よりしの雪　湖涼　夜光

さゝ雪や雪ちるよりは一つ　吐月

白雪は中ゝ大ちる中ゝ　蓼太

ちるちるは雪や雪の夕鳥　如雷

おゝ七十年を其歩を配りてあゝてあるかの
地名あるの白しあるハ汚れ叫ぶを捨てて牧鑒著
明治廿年住吉紙にてこの

飄中吟

葉は散や霞ゝ山をゝゝ　柳肘

静やほしをゆきさゝを枯ゝゝ　完子

さしをゝゝゝ戸あり梅ゝき　金沙

名月やと言ゝ人ゝゝ小袖　吏流

垢ゝて貸ゝ絵はあつさ汁　楚水

ゝ梨や花ゝゝまゝ和水　物雲

油断して[illegible]　自来

ふと[illegible]の茶屋もある柳[illegible]　求光

春雪を六田に起るやよこの雨　鯉半

四方の[illegible]一帰の雉[illegible]の[illegible]　陽馬

[illegible]生[illegible]の[illegible]は[illegible]より　梅勤

白魚や波を焼[illegible]　友鴎

四里[illegible]白一[illegible]　白翅

[illegible]す[illegible]行[illegible]の一つ　雪丸

[illegible]の[illegible]　蛙水

[illegible]物や[illegible]　芦一

[illegible]野や雪と[illegible]　帰巷

[illegible]月や秋[illegible]一[illegible]　有止

探[illegible]移[illegible]　溪里

瓜山[illegible]窓出て[illegible]義の姉　振雪

芝跡を[illegible]杜　三楚

苗代や未しの[illegible]　荊雨

乳の[illegible]　陶浴

印[illegible]や　晴れ里も山かつ　巴童

[illegible]人あり別業　呉山

一[illegible]　橋尾

[illegible]　機石

[illegible]　宜中

松[illegible]や[illegible]　野菊（女）

[illegible]　桃鏡

不[illegible]　丸水

[illegible]　花明

[illegible]　東亀

その音を聞くとほめたる世界　五全

華ぶりや一日ひとつ秋の山　慎車

鶏かうとて行く葉ぶかふ百合の花　左蒙

置人は置寐の夢やかんとも　牛東

ひとつ咲と思ふ柳花　百示

深さひとつ釈迦の花　南羅

梅ゝ香や被ぬ鶏のあるうれ　薄衣

油ぬるとはとまるひとつ枯柳　翠羽

さびのいとふ　ふりやみ孔雀　芳樹

菜の華や菜ゝ咲ても一むら　萬古

塔心ゝ咲や華ぬる奥の院　雨磧

懐ぬして鶏やうしひいふ　芹之

ちる梅ゝ沈る雪あるうき　花上

[illegible]　六渡

[illegible]　蓼把

[illegible]　枝頁

[illegible]　嵐腹

町喜の[illegible]　逸長

[illegible]　該孫客　乙兒

[illegible]　籟河

一墓を[illegible]　桃之

妻[illegible]　冨屋

蚊屋巨燈雖は[illegible]　舎筏

[illegible]の[illegible]　飲河

[illegible]　川

[illegible]　嵐亭

白蘋ハ秋く家ニ来りぬ　葛木

この宮ゝく小原世遠一滝月　白牛

住すしれ美雞百り小野風　泉鳴

菜摘や菜又ぬく人ハ遠ハ　班象

玄又玄遡水

の門雲中

又重中抜

源を辛次

昭和十三年春買取字之序に善本を買入れ
ふたれば讀うるべく、書目第上巻と交換す
佐宜識

一覽

目錄

中澤